



一般社団法人
日本糖尿病・妊娠学会 ニューズレター
 The Japanese Society of Diabetes and Pregnancy News Letter

2016年6月発行 Vol.18 No.1

第34号

完全に電子化されるニュースレター



守屋 達美

北里大学健康管理センター

【巻頭言】

日本糖尿病・妊娠学会が研究会から学会に変貌して15年余が経つ。私自身は、会員歴が20年を超え、ベテランの域に達してきている。学会化の前年の1999年のニュースレター創刊号をみると学会化への経緯が詳細に述べられており、決意を新たにすることができる。会員の方には是非お読みになっていただきたい。

さて、このニュースレターは1999年の発行時から、非常に美しいデザインとともに、年2回私たち会員に様々な有用な情報を届けてくれた。その紙媒体での運用とともに、その一部は日本糖尿病・妊娠学会のホームページにも掲載されていた。バックナンバーは、<http://www.dm-net.co.jp/jsdp/newsletter/> でみることができる。すでにご覧になられた方も多いであろう。

しかし、このニュースレターは、今回から完全にウェブ化されることになった。今まで慣れ親しんできた4頁のニュースレターがなくなるのは寂しいが、時代の流れからはやむを得ないであろう。今までこのニュースレターのレイアウト作成・編集・発行等に関して、多大なるお力をくださった株式会社プラネットの渡邊

まゆみ社長に心からお礼を申し上げたい。

このニュースレターにはさまざまな情報が満載されている。ニュースレターの巻頭言は、前年の年次学術集会会長に書いていただくのが習わしであった。頁をめくると、次回の年次学術集会、次々会の年次学術集会それぞれの案内、トピックス、などが載っている。トピックスには、糖尿病と妊娠に関連した新規の話題や国際学会の情報が掲載されている。トピックスを書き続けてくださった本学会名誉理事長大森安恵先生にも心から感謝申し上げたい。今後このウェブ化を機に紙面をブラッシュアップし、より有用な情報を皆さんにお届けする予定である。これまでどおり年次学術集会のアナウンスはもちろん、トピックスも、内科、産婦人科、小児科の各編集委員に極力最新の話題を書いていただく予定である。

一方、学会の広報としても極めて重要な役割を果たしてきた。私自身は、あまり学会に関連しない施設に配布したこともある。さまざまな学会会場にこのニュースレターが置かれているのを見たことがある人も多いであろう。今後も広報としての役割を担っていく。ウェブ上のニュースレターをプリントアウトして、広報用にも使用できるようにすることも検討中である。

各学会員には、ニュースレターの発行のアナウンスをメール配信する予定である。その際にはぜひこのニュースレターをご覧になっていただき、有用な情報を得ると同時に、お知り合いの方にも当学会の紹介を兼ねて勧めていただけたら幸甚である。

●発行人 理事長 平松祐司

●発行 一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会 www.dm-net.co.jp/jsdp/ 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル (株)創興社内
 TEL.03(5521)2881 FAX.03(5521)2883

編集制作: (有)知人社 ロゴマークデザイン: 杉山光章

第32回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会 開催

テーマ：妊娠をライフステージとしてとらえる～予防から治療までの進歩～

日時：平成28年11月18日(金)・19日(土) 場所：岡山県医師会館



第32回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

清水 一紀

心臓病センター榎原病院
糖尿病内科部長

2016年（平成28年）の第32回年次学術集会は11月18日（金）～19日（土）に、JR岡山駅からすぐの場所に新設された岡山県医師会館（岡山市北区駅元町19番2号）で開催いたします。糖尿病という病気にとって、妊娠は妊娠期のみの特別な期間だけのものではなく、小児期の食育から成人期の生活習慣、そして妊娠、出産後の壮年老年期にわたり関連するものです。そのため産婦人科や一部の糖尿病臨床医だけの問題ではなく、広く医療者に興味をもってもらう必要があることから、妊娠をライフステージとして捉え、妊娠中の耐糖能異常の予防から発症後の治療、また妊娠糖尿病から2型糖尿病の予防、治療を意識してもらうよう「予防から治療までの進歩」をテーマにしました。

内科医の立場から関連の深い妊娠と免疫をサブリミナルなテーマとしました。1型糖尿病と妊娠の関連について特別講演をバルセロナ大学の内分泌学、栄養学教授のアルベルト・レイバ先生にお願いをしています。妊娠中の胰島関連抗体の研究や、妊娠糖尿病のフォローアップなどの研究でも有名な先生です。

また妊娠中に発症する「周産期心筋症」について、国立循環器病センター周産期・婦人科 神谷千津子先生に特別講演をお願いしております。

その他、大きなテーマとして食育を取り上げたいと考えています。成人女性のやせ願望からくる耐糖能異常も問題で、妊娠糖尿病を予防することは食育を考えることが出発点であると考え、企画中です。また糖尿病合併妊娠におけるピアサポートについて考える時間をもちたいと考えています。また多胎と糖尿病というテーマのミニシンポジウムも予定しております。さらに昨年、内渕会長が企画され大好評でした助産師セミナーを今年も開催予定です。岡山は晴れの国であり、災害の最も少ない県といわれております。安心しておいでください。

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会 予告

テーマ：母児の健康と糖代謝異常

日時：平成29年12月2日(土)・3日(日) 会場：シェラトングランデ(旧 宮崎シーガイア)



第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

鯫島 浩

宮崎大学医学部産婦人科教授

第33回の日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を、2017年12月2日(土)、3日(日)の2日間にわたり宮崎市のシーガイア、コンベンションセンターで開催します。現在、教室をあげて鋭意準備を進めています。

テーマは、原点に戻って「母児の健康と糖代謝異常」としました。産科医療にとって糖尿病は、歴史的にみてもハイリスク妊娠の代表です。母体には糖尿病合併症や妊娠糖尿病既往婦人に認められるT2DMやメタボリックシンдром、児には胎児期から新生児期の合併症、出生

後のDOHaD関連と、母児の健康に大きな影響を及ぼすことがわかつきました。また内科、小児科、産婦人科の連携を中心に、関連診療科やメディカルスタッフを含めた多職種連携が重要でかつ、有効な疾患です。

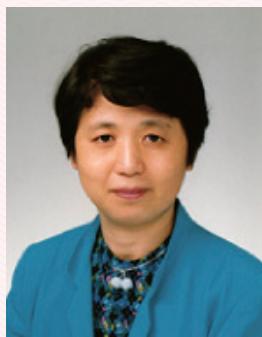
このように大きなテーマを掲げましたので、いろいろな切り口からアプローチしていただき、多くの演題をいただければ幸いです。またこのテーマにそった特別講演やワークショップ、海外からの招聘講演、教育プログラムなども企画中です。

宮崎の12月は晴天に恵まれることが多く、学会場のすぐ横には緑の美しいゴルフコースもあり、南国情緒あふれるロケーションです。伊勢海老を含めて新鮮な魚介類、日本一を誇る宮崎牛、宮崎地鶏、新鮮な野菜や果物も豊富です。楽しく充実した学術集会を目指して準備しておりますので、ぜひ参加してくださいますようお願いします。

第31回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会 報告

テーマ：ウイメンズヘルスケアは小児期から

日時：平成27年11月20日(金)・21日(土) 会場：リーガロイヤルホテル東京



第31回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会会長

内湯 安子

東京女子医科大学
糖尿病センターセンター長

東京は早稲田の森にあるリーガロイヤルホテル東京にて、第31回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を開催できた。多くの会員の皆さんにご参加いただき、改めてここに御礼を申し上げる。

多くの職種の皆さんに参加してもらう

第30回の本会会長安日一郎先生がお書きになつてゐる本会報17巻1号の巻頭言の最後のくだりに、助産師、糖尿病療養指導士、保健師、栄養士はもちろんのこと、そのフォローアップ・チームのリーダーとしての家庭医との協働をうたつておられる。まさしくそのとおりで、あとはそれぞれの職種の参加者を増やし、共通の知識をもちチーム医療を推進させることと考え、参加したいと思わせる学会に、参加してよかつたと思ってもらえる学会にする、そして、東京という地理的特徴を生かす学会を考えた。

口演会場とポスター会場を近くに隔てなく

長年の研究、調査の成果である抄録は一般演題75演題が集まつた。口演とポスター発表の2形式をとつた。ポスター発表の発表時間は短いがポスターを何度でも熟読できる長所がある。そのためには口演会場に長時間座つていて疲れた頭を冷やすように、ふらつと何度でも立ち寄ることができる距離にポスター会場を確保した。当日は、うららかな秋の日差しを浴びた秋の早稲田の森を真下に見てポスター発表が行われた。

特別講演：国内から2人、海外から1人

海外招聘特別講演の演者は大森安恵名誉理事長の広い人脈から、胎盤研究の第一人者オーストリアのDesoye教授にお願いした。糖尿病にまつわるウイメンズヘルスケアのキーワードは成人糖尿病女性、妊娠、胎児の成長、生下時体重、小児成長であるが、ここに胎盤を入れることが共有できたと思う。

国内の特別講演1は川崎医科大学柏原直樹教授で、epigeneticな仕組みを通して次世代により適合する胎児ができるあがるのだが、現代は母胎内環境と生育環境とのミスマッチが起きているという講演であった。翌日の特別講演2の琉球大学益崎裕章教授の講演でさらに進めて、胎生期プログラミングのメカニズム、そこに関与するレプチニンの役割、栄養素の役割を勉強することができた。

DOHaD仮説を2日間にわたつて、内科的角度から勉強することができたと思う。

助産師集中講座を初めて開設

妊娠・出産の一番近くにいるのは助産師である。しかし、日本糖尿病療養指導士に認定されても、助産師業務まではその範囲にはない。もちろん助産師は日本糖尿病療養指導士でなくとも今のところは問題ない。助産師が知っておくべき糖尿病妊婦に関する公的な講習会がなかったといえよう。そこで、日本看護協会常任理事であり、本学会の理事でもある福井トシ子氏に企画をお願いし、「妊娠中の血糖コントロール基本の“き”がわかる！！」と題した助産師集中講座を初めて開設した。少なくともここまで知つていてほしい知識を確保しようというものである。240名もの参加者があった。

単位取得できる学会・団体は全部取得

参加の目的の一つは単位取得であろう。もっともなことである。今回はできるだけ多くの学会・団体に問い合わせをした。10個の資格単位取得の学会とすることができた。詳細は、糖尿病と妊娠15巻2号のプログラムに記載してある。

終わりに

天候にも恵まれ、東京という地理的環境にも恵まれ、本学会をこれまで知らなかつた方々にはこの機会に新規会員となつていただいた。御礼を申し上げる。

妊娠糖尿病が糖尿病病態研究の良い対象でもあるように、この分野の今後の広がりは底知れないものがある。今学会のランチョンセミナーで大森安恵名誉理事長がお話しになつた歌川広重の一幅「小田原」とともに、「皆が心を一つにして、同じ方向に向かえば何事も成し得る」との大森先生のお言葉があつた。詳しくは本学会雑誌「糖尿病と妊娠」16巻2号へ掲載予定であるため、そちらをご覧いただきたい。

大森賞を受賞して



堀江 一郎

長崎大学病院
内分泌・代謝内科（第一内科）

このたび、第31回日本糖尿病・妊娠学会にて大森賞を賜り、誠に光栄に存じます。平松祐司理事長、内瀬安子学会長、選考委員の先生方、学会員の先生方、そして大森安恵先生に感謝申し上げます。

今回の受賞内容は“Efficacy of nutrition therapy for glucose intolerance in Japanese women diagnosed with gestational diabetes based on IADPSG criteria during early gestation”という題名で Diabetes Research and Clinical Practice 107:400-406, 2015に掲載されたものです。

教科書を見ますと「妊娠糖尿病（GDM）は、種々の胎

盤ホルモンの影響で生じるインスリン感受性の低下を成因とし、妊娠経過とともに耐糖能障害が顕在化する」と書かれております。私は内科医ですので普段多くの「妊娠ではない」2型糖尿病患者さんを診ていますが、程度の差こそあれ食事と運動で皆耐糖能は改善します。したがってGDMでも同様に、生活の改善で正常耐糖能（NGT）に戻る妊婦さんもいるはずです。「妊娠経過とともに悪化する」という記述は、実臨床では正しくないと考えます。

今回の後方視研究では、妊娠早期にGDMと診断されても食事療法を徹底することで中期には約半数がNGTに戻ることがわかり、あらためて食事の重要性を示すことができました。現在、日本人妊婦の約1割がGDMですが、母親教室などで早くから食事の重要性を認知させていくことで、かなりのGDMを減らせると思います。これは周産期医療の負担を軽減し、医療費削減にもつながりますので些細なことですが貢献度は大きいと思います。今後はさらにより良い周産期医療、そして産後のウイメンズヘルスケアに貢献できるよう尽力していきたいと思います。

トピックス



当学会名誉理事長

大森 安恵

海老名総合病院・糖尿病センター長

1 読んで欲しかった会報の発行

1985年（昭和60年）に創設した「糖尿病と妊娠に関する研究会」の活動をもっと広く大きく拡大すべきではないかという機運が私が会長を務めているときに盛り上がり、幹事の皆さまのご協力を得て2001年に日本糖尿病・妊娠学会に変換された。研究会を学会化するための条件の一つに、ニューズレターの発行が義務づけられていたので、編集を「株式会社プラネット」に依頼し、1999年11月25日に「糖尿病と妊娠に関する研究会」会報第1号が発行された。

第1号のトピックス欄には、糖尿病母体児の奇形問題を特集したDiabetes Frontierと「Diabetes in the New Millennium」の妊娠の章がわが国から選ばれた」という二つの話題を取り上げている。別稿に「追悼J.Hoet先生を偲んで」が掲載されており、大変ニュース性に富んでいた。

この第1号から今日まで、私は「トピックス欄」を一人で黙々とかき続けてきた。ジャーナリストの田勢康弘氏から『国家と政治-危機の時代の指導者像』の献本を受け、その中に「目を世界に、心を祖国に」という言葉を見つけて感動した。それを「目を世界に、心は患者に」ともじって、それを基盤とし執筆してきた。どれほどの方が読

んでください、お役に立ててくださったどうか。

2 IADPSG (International Association of Diabetes Study Group 日本名：国際糖尿病・妊娠学会) のこと

この国際学会は、私たちがつくった日本の「糖尿病と妊娠に関する研究会」が1994年に第10回記念大会を迎えたとき、アメリカ、イタリア、イギリス、オーストラリア、スウェーデンから招いた5人の演者たちが、異口同音に国際的な交流の大切さ、世界を知ることの大切さを説いたことがきっかけになってつくられた学会である。このことを知っている方がどれだけいるであろうか。第1回1998年オーストラリアのケアンズ、第2回スペインのサンサルバドール、第3回アメリカのパサデナ、第4回インドのチェンナイ、第5回アルゼンチンのブエノスアイレスで開催されている。日本からの参加者は3月という学期末もあり、非常に非常に少ない。日本、カナダ、アメリカ、イスラエル、インド、アルゼンチン、ヨーロッパ、アイルランド、アルジェリアの各糖尿病と妊娠研究会、あるいは糖尿病と妊娠学会の代表者が幹事役を務めている。日本からは大森と赤澤昭一先生、次に大森と豊田長康先生、現在は大森と杉山隆先生が幹事になっている。代表幹事会は年に1～2回、おりをみて開催されている。国際学会は4年に1回のわりで開催される習わしになっている。

この会の代表者は、今年Prof.David McIntyreからアイルランドのProf. Fidelma Dunneに交代された。

3 会報は今後オンライン化される

私はこの会報のトピックスのためにも積極的に外国の学会に参加する努力を行ってきた。もちろんすべて自費である。年齢的なこともあり、トピックスの執筆はこれが最後であろうと思われる。ご愛顧いただいた編集長はじめ関係各位の皆さまには、心から感謝の意を申し述べたいと思う。

ニュースレター新編集委員の紹介



安田 一郎

国立病院機構長崎医療センター
産婦人科部長

このたび、産婦人科領域を担当する新編集委員に就任しました。私が「妊娠と糖尿病」に関わるきっかけは、研修医時代に経験した1型糖尿病合併妊娠で肩甲難産のため死産となった1症例でした。

1981年当時の日本では、1970年代後半からの胎児心拍数モニタリングの導入と普及で産科領域における胎児評価のイノベーションが起こっていた時期でした。一方、

エコーによる胎児発育評価はいまだ初步段階にすぎず、ようやく胎児腹囲測定が注目されはじめたころで胎児体重の推定は現在よりもはるかに不正確でした（今でも巨大児には限界がありますが）。

当時、糖尿病合併妊娠の厳格な血糖管理が周産期予後を改善するという Jovanovic 先生のかの有名なレビューはすでに出版されていましたが、日本における認識はまだまだでしたし、産婦人科においても臨床の興味は発育不全胎児ばかりに集まり、糖尿病性巨大児への関心は至って低かったことを覚えています。貴重な糖尿病性巨大児の死産症例の経験が、本学会発足時の最も若手の世代であった私のその後の医師としてのライフワークの原点となりました。産科とウイメンズヘルスケアの観点から、これからの中年女性の皆さまの興味を惹けるような編集を心がけたいと思います。



菊池 透

埼玉医科大学小児科教授

私は2003年の第19回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(会長内山聖先生)の事務局をさせていただき、2013年からは、学会誌編集委員を務めさせていただいております。

このたび、ニュースレターの編集委員に就任させていただき、誠に光栄に存じます。本学会のニュースレター

では、名誉理事長大森安恵先生、編集長小浜智子先生のご尽力のもと、理事の先生を中心とした巻頭言、次回、次々回の学術集会の情報、大森賞受賞者の紹介、編集委員長の診察室訪問、国際学会の情報など、学会誌「糖尿病と妊娠」では十分にお伝えできない大変貴重な内容を、会員の皆さんにわかりやすくお伝えしてきております。

本学会は、内科医、産婦人科医、小児科医、助産師、看護師、管理栄養士ら、たくさんの職域の会員が「糖尿病と妊娠」に関して学ぶ場です。会員の皆さんに有益な情報をわかりやすく伝えることがニュースレターの使命と考えております。また専門の小児科分野からの情報発信にも心がけていきます。微力ながら、皆さまのご期待に沿えるよう尽力いたします。



柳澤 慶香

東京女子医科大学
糖尿病センター

このたび、日本糖尿病・妊娠学会のニュースレターの編集委員に加えさせていただきました。私は幸運なことに、東京女子医科大学糖尿病センターで糖尿病と妊娠のパイオニアである大森安恵先生に直接ご指導をいただき、糖尿病合併妊婦さんの診療の機会を得ました。

しかし、妊娠に関心をもち、熱心に妊婦さんを診ている

糖尿病専門医は実にまれです。そのようななかでニュースレターではその時々のトピックスや学会情報だけでなく、巻頭言では諸先輩方のさまざまな経験や幅広い知識に触れることができ、チャレンジ最前線、診察室だより、編集長訪問インタビューでは全国でたくさんの先生方ががんばっておられる姿を拝見し、勇気づけられてきました。私の現在の最大の趣味は、オペラ鑑賞です。3度のメシより、VogtとKaufmann が好きです。といっても、わかる方は少ないと思います。仕事も趣味もほとんど絶滅危惧種です。

日本糖尿病・妊娠学会は、内科、産科、小児科、助産師と多くの職種が同じ目的に向かって力を合わせる実にすばらしい学会です。数少ない内科医ですが絶滅しないようがんばっていきたいと思いますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。